

設計から板金や塗装、組立と 社内一貫生産を実現

- 納期相談
- 企画力自信有
- コスト相談
- メイドインジャパン
- 試作可小ロット
- 量産対応



「新日本鋼機」が自信をもつ自動化ライン

業務内容 耐火金庫の 溶接からスタート

昭和42年に、日本鋼機（現 日本金銭機械（株））から独立して創業した。耐火金庫の溶接と組立からスタート。YAG（イットリウム・アルミニウム・ガーネット）レーザーを早くから導入した。「レーザー加工機でどんな仕事をしているのか」と疑問をもたれるような時代だった」と今村雄二社長は振り返る。

取引先の内製化が進み金庫向けの仕事が減ったことをきっかけに、他業種の仕事を少しずつ請け負うようになった。そのため仕事の幅を広げ、電力や重機、防衛といった安定した仕事を受注。平成20年秋のリーマンショックは、特に影響を受けなかった。

強み 今までの経験を 生かした提案力

平成18年にCADを導入した。ときには、今村社長自らプログラミングすることもあった。プログラム専門に担当する社員もいたが、「現場を知らない」と指摘する。加工の現場に携わったうえでCAD設計に入ることで、歪みが出やすい溶接箇所を避けることができ、最適な加工法や対処法を提案できるという。社員にも、この動きを奨励している。

また、平成26年に生産管理システム「APC 21」を導入。さらに、全員タブレット端末を持ち、完全デジタル化の移行に成功した。

相談 相対 実証試験と一貫生産で 独自路線貫く

平成26年に大手電機メーカーと太陽光パネルの部材を開発した。基礎の上に自由自在に取りつけられるアタッチメントだった。部

品の開発と生産のほか、太陽光パネルの実証実験も手がけることになった。実証試験費用は使用設備を工夫した結果、工業試験所よりも約3分の1に抑えることができた。顧客から高い評価を受け、強みの一つとなった。

また、成形から完成品までを手がけているのも特性の一つ。手薄な部分があれば周辺の企業と連携しながら、仕上げていく。この取り組みを通じて直近の1年間で、前年比プラス1億円の売り上げになった。「社内だけでなく連携の成果」と今村社長は話す。

後の 今展望 IoT対応の 生産体制を検討

今村社長は、自社独自の生産体制を構築していく上でIoT（モノのインターネット）に大きな関心を寄せている。IoTはもちろんのこと、AI（人工知能）が搭載された加工機がいずれ登場するとみている。「そういった加工機を活用した分野にチャレンジしたい」と今村社長は力を込める。

金庫の溶接から始まり、これまで発電所関連や太陽光パネルなど新分野に挑戦してきた。最近では地熱発電や植物工場などが登場しており、そうした分野にも足がかりを作りたいところ。「営業展開を少しずつ変えていく」と今後の方針を示す。これら新分野のような付加価値のあるところに携わっていく。



CADを使用して設計



YAGレーザーを取り入れた加工

当社の歴史



昭和42年に、日本鋼機（現 日本金銭機械（株））から独立して創業しました。平成10年にYAG（イットリウム・アルミニウム・ガーネット）レーザー、平成18年に3次元CADを導入するなど新しい設備を積極的に導入し、仕事の幅を広げています。実証試験に挑戦したこともあり、コスト低減に寄与しました。あらゆる業界に参入し、受注機会を増やしていきたいと考えています。

代表取締役 **今村 雄二**さん

<http://www.shinnihon-kohki.co.jp/>

主な事業内容
精密钣金、塗装、組立

主な取引先(納入先)
大手電機メーカー

- 住 所 〒581-0034 八尾市 弓削町南2-28
- TEL 072-948-6298
- FAX 072-949-4923
- 創 業 昭和42年 4月
- 設 立 平成 6年 11月
- 資本金 1,000万円
- 従業員 20名